標識をつけたハマグリを放流しています

浅海干潟研究部　内川純一

熊本県は、日本在来種であるハマグリの全国最大の生産県ですが、近年はその漁獲量が大きく減少しています。

本県でアサリと並び干潟の採貝漁業の対象種として重要なハマグリは、高級食材として高値で取引されることから、全国各地でその価値が再認識されており、近年、資源の回復やブランド商品としての販売促進が取り組まれ始めています。

このハマグリを本県の特産種としてブランド化を進めるためにも、漁獲量の安定・増大を図ることが急務となっており、そのための対策として、平成 21 年度からハマグリ稚貝の種苗生産や中間育成技術を開発し、新たな栽培魚種としての可能性について検討する事業を進めています。

この事業の中で、浅海干潟研究部では、ハマグリの種苗を「いつ、どこに、どのように放流すれば最も高い放流効果を得ることができるか」という放流技術の開発について試験を行っています。

平成 21 年から平成 22 年度にかけて漁業者の手によって漁獲されたハマグリを買い取り、殻表面に標識を付けて（図１参照）、緑川河口干潟のいろいろな場所に放流し、放流したハマグリが、再び「どこで」、「どれくらい」捕獲されるかということについて調査を行い、ハマグリの移動生態や回収率について検討しています。（図２参照）

また、平成 23 年 3 月には種苗生産した殻長約 10mm のハマグリに標識を付けて放流しており、11 月に初めて再捕されました。今後もこの追跡調査を継続して行っていきますので、下の写真のような刻印標識の入ったハマグリを再捕されたときには、所属する漁協へ持ち込みいただき、再捕された場所をお知らせいただきますよう、よろしくお願いいたします。

図１　標識をつけたハマグリ

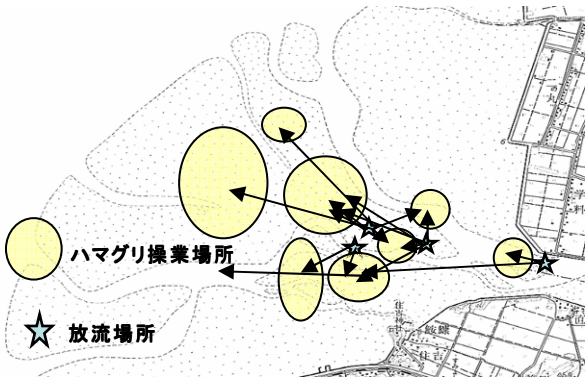

図２　放流したハマグリの再捕地点